

令和5年9月19日（火）全校集会

学校長 下村 昌弘



全校の皆さん、おはようございます。

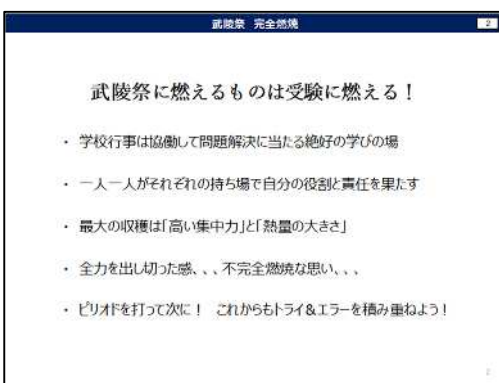
さて、学校祭の後、長い休日となりましたが、まずもって休校という事態を招いてしまい、通常の教育活動を展開できなかったことを心からお詫びします。

いろいろな意味できつい思いをした人たちもたくさんいるのではないのでしょうか。体調は整ったでしょうか。学習は順調に進んだでしょうか。

特に3年生にとってはこの間、授業が十分にできなかったことが大変気にかかっています。これから挽回すべく緊張感と熱意をもって一緒に頑張っていきましょう。

「災い転じて福となす」と言います。この休校期間は心と体の調子を整えるとともに自律的・主体的に学習に取り組むいい試金石だったのかもしれない。

そこで今日は一連の武陵祭への取組を総括し、次への意欲を持ってもらえるような話をしたいと思います。内容的には大体こんな話です。



まずは、武陵祭、本当にご苦労様でした。

体育祭、文化祭と学校行事の中でもとりわけ意味の大きいこのイベントに対し、一人一人がそれぞれそれぞれの持ち場でその役割と責任を果たし、みんなで作り上げた素晴らしい学校祭でした。

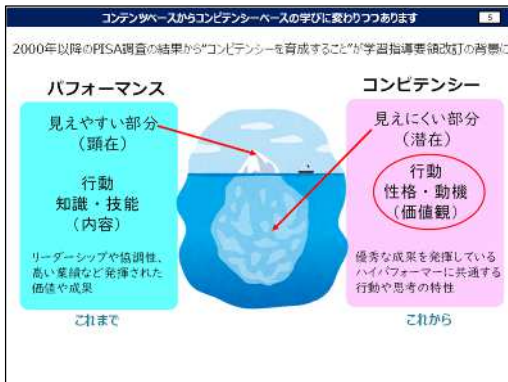
見に来ていただいた外部の方からも武高生のポテンシャルの高さ、一つの目的に向かって燃え上がる熱量をほめていただきました。

そして、もっともっと皆さんの主体性が育つことを期待されていたことを伝えておきます。

その武陵祭も終わりました。完全燃焼できたという人も、うまくいかず後悔が残る人も、また残念ながら体調を崩してしまい本番に参加できなかった人もいろいろいるでしょう。

でも、また節目が来ました。

「武陵祭に燃えるものは受験に燃える」と言います。「受験」とは一つの例えですが、武陵祭で発揮した「高い集中力」と「熱量の大きさ」を、3年生にとってはまさに受験勉強に、そして1・2年生にとっては授業や課外活動に向けなければなりません。「集中力」と「熱量」これが総括のキーワードです。



この絵を見てください。みなさんには聞きなれない言葉かもしれませんが、教育の世界では大切な言葉です。「パフォーマンス」と「コンピテンシー」。これが氷山の一角モデルで示されています。

大量生産・大量消費が礼賛されていた時代、古きよき昭和の時代は、どちらかといえば左側の「パフォーマンス」の部分が重視されていました。ペーパーテストで点数化して見えやすい知識・技能、いわゆる教科書の内容をどれだけたくさん正確に再現できるか、これが勉強の中心でした。

しかし、1990年代、バブル崩壊以降、世界は情報社会となり、G A F Aと呼ばれる情報産業、新しい価値を生み出す企業やベンチャー企業が席卷してきました。

いわゆる Society5.0 といわれるこれからの時代に皆さんは社会の中核となるわけですが、そういう時代を生き抜く力として右側の「コンピテンシー」の部分を磨かなくてはならない。これが現代社会の基本的な考え方です。

「コンピテンシー」とは水面下に隠れている部分のことですが、これが皆さんの行動の背景・根底にある「性格」や「動機」、「価値観」、先ほどの総括の言葉を使うと、「集中力」や「熱量」といった、いわゆる人を行動に駆り立てる「エンジン」の部分なのです。

正直に言うと、私たち武雄高校の先生方の多くはパフォーマンスを鍛える指導は県内トップクラスです。しかし「コンピテンシー」を鍛えるのは私も含めてまだ得意ではありません。

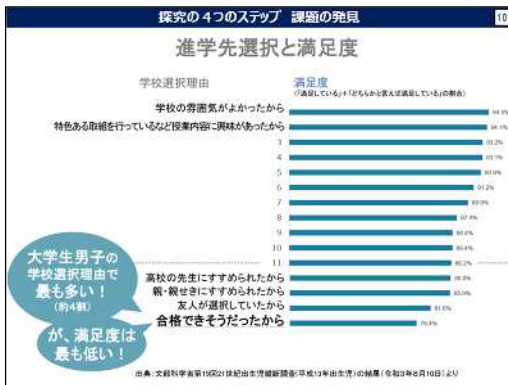
そのわけは、そもそも、「コンピテンシー」の中核をなす「行動」、「性格」、「動機」といった「価値観」は外から与えられるものではないからです。

皆さんもすでに気付いているように、これはあなた自身が作り上げ、鍛え上げていくべきものなのです。

加えて言うと、こうした「行動」・「性格」・「動機」・「価値観」といったものは学校祭への取組といった「実の場」、いわゆる「体験活動」とおしてより強く鍛えられるものなのです。

つまり皆さん一人一人はこの武陵祭への取組をとおして、集中し、ものすごい熱量でこの水面下の部分を強く刺激したわけです。

そこに私は心から賞賛の言葉を贈りたいし、皆さんにはこれからの高校生活に対する自信と勇気を持ってほしいと思っています。



では次にこのグラフを見てください。これは文部科学省の調査結果ですが、大学への進学先の選択と満足度の関係を表したものです。

上のほう「学校の雰囲気が良かった」「特色ある取組を行っているなど授業内容に興味があった」という理由で大学を選択した学生は満足度が高い。

これに対し、下の方、学校の先生や家族・親戚、友人に勧められた、いわゆる外発的動機付けで大学に入学した学生は満足度がそんなに高くはない。

ましてや「合格できそうだったから」という理由は心情的にはとてもよくわかるのですが、男子大学生にありがちのようで、残念ながら満足度が最も低いという結果です。

何が言いたいかというと、とくに3年生はこれからの受験勉強はつらく苦しいものがあると思いますが、自分が憧れる大学から絶対に目をそらさず「そこで〇〇を学びたい」という気持ちを強く持ち続けることが「コンピテンシー（水面下の力）」の大きさとなり、受験勉強を後押ししてくれるだろうと思います。

1学期の始業式でウサギと亀の話をしましたね。ウサギはどこを見ていたか？ カメはどこを見ていたか？という話です。もう一回おさらいしたい人は学校HPを見てください。

東京工業大学の益一哉学長
「入学したとき、自分は何をしたいのだろうか、と考える人は伸びます。そもそも入試は一つの基準にすぎません。入学試験の成績と卒業するときの成績には相関がありませんから」

「MITは全米トップレベルの工業系大学だが、あそここの学生は課外活動を平均4つもやっている。平日はひたすら勉強して土日や夏休みに課外活動をしているのだと思うが、それが人間力や人のネットワークを生み出す。いろいろな人と触れ合うことでインスパイア(刺激)されて勉学にも注力できる。何かうまくいかないことがあっても落ち込まないことにつながる」

- ◆ 受験勉強が得意なこと、その後の人生で研究者や技術者として大成することは全く別話。
- ◆ 入試を軽視してよいということではなく、重要なのは「何を学ぶか」であり、「考え続ける意志を持つ」こと

では今日の話の締めくくりに東京工業大学の益一哉学長の話を紹介しましょう。

東京工業大学は来年の秋をめぐりに東京医科歯科大学と統合し東京科学大学として新しい大学教育を展開しようとしています。

その益学長の話ですが、上の段を読み上げます。

「入学したとき、自分は何をしたいのだろうか、と考える人は伸びる。そもそも入試は一つの基準にすぎない。入学試験の成績と卒業するときの成績には相関はない」

高校でもそうですね。かつて補欠で高校に入学してきた生徒さんが結果、九州大学の法学部に合格しました。レアケースかも知れませんが、伸びていく生徒さんはたくさんいます。そしてそういう「伸びる」生徒さんの共通点として、3年次の秋から冬、つまり「受験の修羅場」に耐えぬく覚悟を持っていたということです。話を戻します。

中央の段を見てください。マサチューセッツ工科大学の学生を引きあいに「あその学生は課外活動を平均4つもやっている。平日はひたすら勉強して土日や夏休みに課外活動をしているのだと思うが、それが人間力や人とのネットワークを生み出す。いろいろな人と触れ合うことでインスパイア（刺激）されて勉学にも注力できる。何かうまくいかないことがあっても落ち込まないことにつながる」と言っています。

私が今日の話の締めには益学長の話を用いたのは、受験勉強が得意になることは決して悪いことではありませんが、それよりも人生において大きな意味をなすのは「コンピテンシー(水面下の部分)」を鍛えることだということを皆さんに分かってほしかったからです。

この「コンピテンシー」は学校行事、課外活動、実体験で鍛えられる部分が多い。

だから1・2年生はこのことを特に真剣に受け止めてください。部活動のみならず、課外活動に積極的に参加をしてください。それがあなたの主体性を磨き、エンジンを強くしてくれます。

今の高校生にとって文武の「武」は一つの部活動だけを意味するものではなくなりました。まちづくり、留学、総合的な探究の時間など、たくさんのトライ&エラーを経験してタフな人間になって下さい。

3年生の皆さんも、これからの模擬試験はトライ&エラーの繰り返しです。大事なのは「何を学びたいか」「考え続ける意志」を放棄しないことです。トライ&エラーというこれからの受験勉強の中でコンピテンシーが鍛えられます。

さあ、新しいタームの始まりです。これまでの生活にピリオドをしっかりと打って、次のステージに上がってください。

武陵祭でたくましさを増した皆さんのさらなる頑張りを期待しています。やればできる。頑張ってください。

おわり